高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
vol. 102
2023.08

リレー随筆

涙香、孤蝶、雨村が〈探偵〉を生んだのだ

湯浅　篤志

明治二十年代以降、探偵小説は低級で扇情的な読み物として扱われていました。それは法律や道徳をおかす「犯罪」という事件を興味本位で描いていたからです。しかし、そういう暗い事件に対して謎解きを主眼とし、その真相を明らかにして世の中の裏面を暴いていくのが探偵小説です。ジャーナリストの黒岩涙香は、そういう探偵小説を海外作品をヒントにして「都新聞」に書き始め、大ヒットさせました。その成功は、巷にさまざまな探偵小説を生み出します。

黒岩涙香

しかし、探偵小説はあいかわらず娯楽作品として扱われ、文学ではなく、気晴らしのために読む小説として受け取られ続けました。そこに風穴を開けたのが、馬場孤蝶と森下雨村の師弟コンビでした。

孤蝶は、明治二十六年に文芸雑誌「文學界」の同人になります。そこには樋口一葉や島崎藤村がいました。また、斎藤緑雨とも仲良くなり、孤蝶は彼らとの交流を深め、文学を精進させます。やがて慶応大学でヨーロッパ文学を教えるようになり、早稲田大学にも出講します。そのときの講義に雨村がいたのです。

雨村は、大学を卒業した後、縁あって博文館に入社します。大正九年には若者向けの総合雑誌「新青年」の発行を任されました。そのとき雑誌の特徴になる読み物を探していたのですが、ある日、探偵小説を思いつきます。今まで低級とされてきた探偵小説を古い形ではなく、海外の素晴らしい小説を読みやすい形に直して、「新青年」の目玉として載せようと思ったのです。

馬場孤蝶

そのとき相談したのが、孤蝶でした。孤蝶先生なら海外作品をたくさん読んでいるので、ここはひとつ、先生に相談して探偵小説を盛り上げていこうと思ったのです。孤蝶も探偵小説の面白さに気づき、雨村とともに探偵小説の発展に協力します。江戸川乱歩が孤蝶の探偵小説についての講演を聞いて、作家デビュー作の「二銭銅貨」を雨村に送ったのは有名な話ですね。

森下雨村（早稲田大学時代）

こうして、黒岩涙香が生んだ日本の探偵小説は馬場孤蝶、森下雨村の努力で大正十年代から昭和初年代に大きなブームになりました。まさに高知の生んだ三人が、日本の〈探偵〉たちをめざめさせたと言っても過言ではないのです。

（大正文学研究者）

Report

好評開催中！

アリスの世界展

―不思議な冒険の招待状―

令和5年7月8日(土)≫9月18日(月祝)

7月から開催中のアリスの世界展、お陰様で皆様に好評をいただいております。

『アリス』の物語の面白さに焦点を置き、その世界を楽しむというコンセプトの展覧会。海洋堂のフィギュアとトリックアートが大いにその雰囲気を盛り上げる中、詩や名言、そして世界各国の絵本を紹介しています。

子どもたちに人気なのは、やはり海洋堂フィギュアによるフォトスポット。親世代やご年配の方からは、「高知に海洋堂があってよかった」「こういう方法で子どもたちに興味を持ってもらえるのは素晴らしい」と評価していただきました。

また、楽しさいっぱいのトリックアートには、海洋堂のフィギュアや、キャロルが書いた他の作品、日本で『アリス』の連載がされた雑誌など、さまざまな小ネタが隠されていますので、ぜひご来館の折には探してみてください。

アリスに登場する詩の面白さは、展示解説の中で反応が大きい部分で、「こんなに奥深いとは知らなかった！」と喜んでくださるお客様が多くいらっしゃいました。会場のあちこちに配置しているキャラクターの名言も、見る方によって「刺さる」言葉が違うようで、気に入った言葉を探しながらご覧になるのも楽しいと思います。

さらに、絵本の多さ、バラエティーの豊かさも楽しんでいただいているようです。イギリスの絵本のみならず、世界各国のアリスの絵本を並べました。日本の古い絵本も反響が大きく、「この絵本、私も持っていたの」と懐かしそうにおっしゃるお客様の思い出話に、聞いているこちらまで楽しい気持ちになります。

アリスの世界展は、9月18日(月・祝)まで。高知発の企画展となっておりますので、ぜひ、この機会にお楽しみください。

（学芸課／川島禎子）

展示風景

『鏡の国』に登場する鏡文字のジャバウォッキーの詩。
鏡に映る世界が楽しめる。

展示室入り口。奥にアリスの世界が見える。

この秋開催！

めざめる探偵たち

～文豪ストレイドッグス×高知県立文学館～

会期　令和5年10月7日(土)～令和6年1月8日(月・祝)
午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

読みやすさ・分かりやすさが重視され、往年の名作が親しまれにくくなった現代。そのなかで、100年を経てなお本屋から作品が消えず、数年ごとにドラマや映画で映像化される稀有な探偵小説作家がいます。江戸川乱歩、横溝正史はその代表格ともいえましょう。

今年は乱歩が「二銭銅貨」で雑誌「新青年」より作家デビューしてから100周年を迎えます。

当館では、この記念の年に大人気作品「文豪ストレイドッグス」とのコラボ展示を再び行いつつ、乱歩や正史らに影響を与え、日本探偵小説の黎明期を支えた高知県出身の文学者・黒岩涙香(くろいわるいこう)、馬場孤蝶(ばばこちょう)、森下雨村(もりしたうそん)を紹介する展覧会を開催します。

涙香・孤蝶・雨村について、かつて乱歩は随筆で、「涙香は少年時代の私に探偵小説の面白さを教えてくれた。私は自分でこの影響を多分に感じている。馬場さんは随筆や講演で、私に探偵小説を書いて見ようという勇気をつけてくれた。森下さんは私の処女作を直ちに認めて、それを「新青年」に発表してくれた。私が探偵作家となった原動力であり、推薦者であるこの三人が、揃って土佐人であったことは、何かしら不思議な因縁のような感じがする。

モダンな表紙が特徴的な「新青年」

土佐の風土と探偵小説は、どこでつながっているのであろうか。土佐人の伝統と性格の内には、探偵小説（謎と推理の小説）を愛好するような要素が、他国人に比べて濃厚なのであろうか。私は折があったら、土佐かたぎの歴史から、この秘密の鍵を探り出して見たいと思っている。」（昭和29（1954）年7月発行「南風」第2巻7号「土佐と探偵小説」より）と述べました。

本展では、乱歩の示す〝秘密の鍵〟になんとか迫りたいと、湯浅篤志氏（大正文学研究者、「新青年研究会」会員）にご協力をいただきながら準備を進めています。

「南風」第2巻7号

あわせてご注目いただきたいのが、若い世代を中心に圧倒的な人気を誇り、テレビアニメ第5シーズンも好評放送中の『文豪ストレイドッグス』とのコラボ展示です。

文豪の名を冠したキャラクターたちがそれぞれ迷い、悩みながら「生きかた」を模索して戦う本作は実際の文豪作品に親しむきっかけを与えてくれています。ますます冴えわたる文ストの魅力的な世界をアニメ描き下ろしイラストなどを交えてご紹介します。

奇しくも開幕日は探偵小説の元祖エドガー・アラン・ポーの没日にあたります。ポー以降、さまざまな作家がめざめさせた探偵作品の数々にぜひ触れてみてください。

（学芸課／福冨陽子）

©2018 朝霧カフカ・春河35/KADOKAWA/文豪ストレイドッグスDA製作委員会

Report

誕生50周年記念

ベルサイユのばら展

―ベルばらは永遠に―

©池田理代子プロダクション

県内外から多くのお客様にお越しいただいた「誕生50周年記念　ベルサイユのばら展―ベルばらは永遠に―」が6月18日（日）に無事閉幕しました。

展覧会の一番の見どころは何と言っても、約180点の原画を間近でご覧いただけることでした。一筆一筆迷いのない線の美しさや、イラスト部分に修正の跡がほぼないことなど、作者・池田理代子さんの力強くかつ繊細な仕事を目の当たりにし、「原画のすごさが際立っていた。単行本より感情が揺さぶられる」「生原画の美しさにほれぼれする」など原画の持つ圧倒的な力に引き込まれたお客様が多くいらっしゃいました。

東京、大阪の大規模会場では宝塚歌劇団の「ベルサイユのばら」の衣装などの華やかなコーナーがありましたが、当館では展示スペースの都合上実現できませんでした。しかし、2階へあがる階段を宮殿に見立て、赤じゅうたんを敷き、踊り場には金縁の大きな額にはいった肖像画風パネルやシャンデリアを設置するなど、展示室までの導入部の華やかな雰囲気づくりに努めました。

また、当館独自の展示として、フランス革命と自由民権のつながりを紹介したパネルを設置。常設展示室をご覧になったお客様から「高知県人とフランスの交流を知って驚いた。（中略）板垣が持ち帰ったフランスの小説をぜひ見たいものである。」という感想を寄せていただくなど、『ベルサイユのばら』をきっかけに自由民権文学へと興味をつなげることができました。

最後になりましたが、様々な関連イベントなど、当館独自の試みにも快くご許可くださった池田理代子プロダクション様はじめ、ご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。

（学芸課／岡本美和）

展示風景

変わる常設展

企画コーナー入れ替えのご案内

高知県立文学館名物の「変わる常設展」。毎年、ローテーション方式でたくさんの作家をご紹介しており、いつ見ても新たな発見のある常設展となっています。今年度の高知県立文学館の常設展入れ替えは3か所で、秋から来春頃を予定しています。

一つ目は、常設展入口入ってすぐの所にある「現在の作家」コーナー。門田隆将さんから、最近、第一歌集『水上バス浅草行き』で大きな話題となった岡本真帆さんに入れ替える予定です。岡本さんの瑞々しく、また親しみを感じる短歌を皆さんにご紹介したいと思います。

二つ目は、常設展示室の中でも一番広い部屋にある「現代の文学」コーナーから、両親が高知出身で自分も高知に本籍があった作家田中英光を紹介します。彼は師である太宰治に心酔し、太宰の死の翌年に後を追うように亡くなりました。英光の資料は、最近寄贈いただいた、故西村賢太旧蔵資料が中心になる予定です。西村賢太と言えば、藤澤清造に私淑していたことがよく知られていますが、それ以前は田中英光を愛し、『田中英光私研究』を第八輯まで出していました。当館で平成23年に開催された「太宰治と田中英光展」の関係で「藤並の森」55号に寄稿をお願いした時、快く巻頭リレー随筆を書いてくださったことを懐かしく思い出します。今回は太宰―英光―西村賢太というつながりを軸にご紹介できればと考えています。

三つ目は、同じく「現代の文学」コーナーの田宮虎彦です。雑誌「世界」に載った「絵本」が芥川賞候補となるも、芥川賞を超えた作家として見送られたという逸話があるほど小説が巧みな作家です。『霧の中』『落城』などの歴史ものに定評がありますが、一方で亡くなった妻との愛にあふれる著作『愛のかたみ』をはじめとする作品群もベストセラーになりました。こちらも、最近寄贈いただいた資料も含めて展示できればと鋭意準備中です。

皆さんに寄贈いただいた資料をはじめ、当館で収集した新しい資料をお披露目する場でもある常設展示室。ネット上では紹介していない、高知に来ないと見られない貴重な資料から、もしかすると新たな発見もあるかもしれません。ぜひ、お越しください。

（学芸課／川島禎子）

101

土佐文学さんぽ

「土佐梁山泊」の青年達

谷　是（ただし）

今日「土佐梁山泊」と言っても、知る人も少なくなった。昭和三年の五月、香美郡野市町の小学校の校庭で、せんだんの紫の花が薫風に吹かれて落ちてくる中、中村伝喜（でんきし）が「国語」の本を読んでいた。青年団長の杉村正がのぞき込んだ。「一緒に勉強をしてみませんか」と声をかけたら、「してみましょう」という話。「そんなら先生の試験を受けてみますか」「やってみましょう」と意気投合。物部川から水を引き入れた舟入川の武知橋のたもと、河畔の民家の二階を借りて、合宿をすることになり、浜田源、原清澄が加わり「土佐梁山泊」と名付けた。当時は〝小検、文検〟などと言って、師範学校へも行けない青年達は、検定試験を受けて合格しなければ、教師の資格が得られなかった。

その中、類は類を呼び、集まり集（つど）いて、同人、泊友、顧問などを加えると、五十人、百人を数えることとなり、熱い友情に結ばれる「青年の学問グループ」となった。

有沢一郎、上田庄三郎、内田祥穂、大塚三綱、岡本弥太、木戸昭平、榊原忠彦、小砂丘忠義、佐藤いづみ、里見義裕、沢英彦、島崎曙海、高鴨金広、高橋武行、田村豊崇、筒井美次、恒石草人、西内薫、橋詰泰二、浜田数義、浜田清次、藤田太郎、細木歳男、横川末吉、吉野忠、吉本青司、横川正郎、依光亦義、立仙啓一など、個性溢れる人格集団に拡がり、学問に励んだ。彼達の多くは、教師となり、〝文学の心〟を伝えたが、大正文芸時代の残映であったとも言えよう。

中村伝喜は二等兵に召集されたとき、幼なじみの上官であるT（中隊長）が見廻りに来た。落葉を掃（は）いていたが〝敬礼〟という号令にろうばいして、とっさのことで手にしていた「竹ほうき」を立てて、「捧（ささ）げ銃（つつ）」をしてみんなの面前でどなりつけられた。

知亞堂に又敬礼す落葉樹

とは、その時の句である。

また、いつも皆に「デンキ」と呼ばれていたが、演習の前ゲートルがうまくはけず、モタモタしているところへ上官が来て「お前は、演習に出る気か出んきか」と言われて「はい！デンキであります」と答えたら「馬鹿者！」と叱責された。これも直話で聞いた話である。

（郷土史家）

中村伝喜著「土佐梁山泊」（富士書房）・「春旅秋旅」（高知新聞社）

香美郡野市町西野・舟入川武知橋のたもと、「土佐梁山泊」の跡、今コンビニの駐車場になっている。古老の談「元田中鮮魚店の二階あたりではないか」

資料受贈報告

寄贈資料から

句集『朝顔の紺』
亀井雉子男著　文學の森刊
令和5（2023）年6月
221頁
亀井雉子男氏寄贈

亀井雉子男（きじお）さんは、高知県中土佐町生まれの俳人です。平成23（2011）年に第25回俳壇賞受賞、平成27（2015）年には第59回高知県出版文化賞を受賞されています。平成29（2017）年には俳誌「四万十」を創刊、高知県短詩型文学賞選考委員長を務めるなど喜寿を迎える現在も精力的に活動されています。

亀井さんは、中学3年生のときに雑誌「中学時代」の俳句欄に投稿した句の入選をきっかけに、この時の選者であった石田波郷主宰の俳誌「鶴」に入会し師事します。後に上京を経験。平成16（2004）年に刊行した第1句集『朴の芽』には、上京の際に感じた家郷を遠く離れ、不案内な都市生活を送る不安、憂愁、激情を詠んだ句も収められています。帰高後は、同じく鶴同人であった高橋柿花主宰の「夏爐」に入会。平成26（2014）年には第2句集『青山河』を刊行。蛇、猪、軍鶏、鯰、亀などの生き物の句が多く、現在亀井さんが居を構える四万十の豊かな自然と風土にこだわった、郷土愛ある1冊です。

今回は第3句集となる『朝顔の紺』をご寄贈下さいました。句集名は集中の「朝顔の紺いつまでも波郷弟子」によるものです。「朝顔の紺の彼方の月日かな」、波郷初期の代表作の一つで、朝顔を見て過ぎ去った月日に思いを馳せている情感豊かな句です。あとがきに「波郷の「鶴」に魅せられ60年。（中略）良き師に恵まれ「鶴」に学んできたことを誇りに思う」と亀井さんは綴っており、句集名「朝顔の紺」に波郷への敬慕を感じます。亀井さんの最新句集『朝顔の紺』他、これまでご寄贈いただいた代表を務める俳誌「四万十」は、当館常設展の閲覧コーナーでご覧いただけます。

（学芸課／山崎真理）

受贈報告

（令和5年5月～7月）敬称略

▼有川ひろ・「Au prochain arrêt（『阪急電車』フランス語版）」有川ひろ著　Sophie Refle訳　Actes Sud刊
▼中脇初枝・「ブッチェットのぼうし」中脇初枝再話　アヤ井アキコ絵　あすなろ書房刊
▼祥伝社・「絵師金蔵　赤色浄土」藤原緋沙子著　祥伝社刊
▼佐藤元紀・「千葉大学教育学部研究紀要　71巻　抜刷　『被征服者』／『被征服民族』たちの声－岡本彌太・未刊詩集『山河』の可能性」佐藤元紀著　千葉大学教育学部刊
▼葉名尻竜一・「立正大学大学院文学研究科紀要39号抜刷　嶋岡晨のメモ書きに視る寺山修司との『様式論争』－終局のその後の展望に向けて－」葉名尻竜一著　立正大学大学院文学研究科刊
▼桜井仁・「北見志保子全歌集　桜井仁編　羽衣出版刊」
▼山田功・「青少年のための寺田寅彦読本　日本のX線結晶学の祖　寺田寅彦～輝く先見性～」山田功著　寺田寅彦記念館友の会刊「他」
▼下川英子・「子規研究　88号　清水英司編　半田美永刊」
▼竹崎いと・「句集のぎく　竹崎いと著刊」
▼國友　積・「詩集　生命の風光　國友　積著　積雲社刊」
▼高知ペンクラブ・「高知文芸年鑑　2023年版　高知文芸年鑑編集委員会編　高知ペンクラブ刊」
▼窮理舎・「窮理　23号　伊崎修通編　窮理舎刊」
▼『新青年』研究会・「『新青年』趣味　23号　『新青年』趣味編集委員会編刊」

トッピクス 01

藤原緋沙子先生 記念講演会

令和5年7月14日(金)に、作家の藤原緋沙子先生の記念講演会を開催しました。

藤原先生は、高知県生まれで、立命館大学文学部史学科をご卒業されました。シナリオライターとして活躍するかたわら、小松左京主宰の「創翔塾」で小説家を志し、2002年に「隅田川御用帳」シリーズの第1巻『雁の宿』で小説家デビューされました。2013年には「隅田川御用帳」シリーズで第2回歴史時代作家クラブ賞シリーズ賞を受賞されました。その他、「橋廻り同心」シリーズなど、数多くのシリーズものを執筆しています。人情時代小説の名手として、リアリティあふれる物語空間の創出、意外性に満ちたストーリー、魅力的な人物造形などで、幅広い支持を集めています。

満員の聴衆を前に講演する藤原緋沙子先生

当日は、作家生活20周年記念作品として5月に出版された、『絵師金蔵　赤色浄土』(祥伝社刊)にまつわるお話や、創作秘話などを聞かせていただきました。多くの文献資料を読み込み、史実とされている事柄から絵金の心情を考察され、絵師としての金蔵の祈りのごとき創作活動を生き生きと描かれている作品の魅力と、先生のお人柄に 80名の聴衆もどんどん引き込まれた1時間でした。

(学芸課長／織田敦子)

トッピクス 02

第26回 児童生徒文学作品朗読コンクール 今年も開催!!

今年で26回目を迎える児童生徒文学作品朗読コンクール。子どもたちに朗読を通して文学に親しんでいただきたいという願いを込めて、平成10年から始まりました。県内の小中学生を対象にしており、全国的にも珍しいコンクールとして好評いただいています。

参加する児童生徒の皆さんはまず夏休み中に開催される地区審査に出場し、11月の県審査に臨みます。コロナ以降、放送部の減少や生活様式の変化などで「声を出して読む」機会が少なくなりましたが、それでも自分ならではの表現を目指して様々な文学作品に挑戦する児童生徒の皆さんに、私たちも大きな力をいただいています。

今年は追加募集も行い、32校、総勢90名の皆さんから応募が集まりました11月の県審査では声優・俳優・ナレーターである堀井真吾さんを特別審査委員としてお招きします。第一線で長年活躍する堀井さんによる朗読の実践や講演も予定していますので、地区審査とともに県審査もぜひご注目ください。

(学芸課／福冨陽子)

昨年開催した県審査表彰式小学生の部の集合写真

第26回 児童生徒文学作品朗読コンクール

■地区審査(公開)県内3会場

【東部】
8月16日(水)午前10時00分～
田野町ふれあいセンター 多目的会議室

【西部】
8月18日(金)午前10時30分～
大方あかつき館　レクチャーホール

【高知】
8月20日(日)午後1時00分～
高知県立文学館　1F　ホール
8月21日(月)午前9時30分～
高知県立文学館　1F　ホール

■県審査
11月5日(日)午後1時00分～
高知城ホール4F　多目的ホール

※会場が文学館ではありませんのでご注意ください。

ショップより
from the shop

今年の夏はよさこい祭りも4年ぶりに完全復活し、いよいよ夏本番となりました。

文学館ではアリスの世界展が始まり、連日たくさんのお客様にご来館頂いています。展示室はチェシャネコ、トランプの女王といったアリスの不思議の世界が広がる空間となっていますが、ミュージアムショップでもアリスをイメージした商品を販売しています。

紙ものでは阪急百貨店はじめ、国内の文具販売イベントに出品している作家さん達の商品が人気です。どれもアリスの世界観を彷彿とさせる素敵な商品ばかりです。ご自身のお気に入りを見つけてみてはいかがでしょうか。

その他には海洋堂さんのカプセルフィギュアもあります。ガチャを回して何が出るかはお楽しみ！

お誘い合わせの上、ぜひご来館下さいませ。

（総務事業課／大原良子）

館長エッセイ

文学館での勤務も、早いもので一年が経過した。

その間、5本の企画展を開催し、お陰様で無事終了することができた。少々手前味噌ではあるが、そのどれもが担当学芸員の思いが詰まった一見の価値ある展覧会であったように思う。

現在は、「アリスの世界展 ―不思議な冒険の招待状―」を開催中だが、これにもナンセンスやパロディー詩、言葉遊びなどで彩られた不思議な世界観を単に文字だけでなく、視覚的にも楽しむことができる仕掛けや工夫がいたるところに盛り込まれている。この夏の1日、奇妙で不思議な世界を少しだけのぞき込む冒険の旅へ出てみませんか？

さて、展覧会以外で特に印象に残っている取組みが、全国的にも珍しい小中学生を対象とした「児童生徒文学作品朗読コンクール」である。館に来てまだ間もない昨年8月、それぞれが個性豊かに感情たっぷりに表現するその素晴らしさに心震えた地区審査の場面が忘れられないが、今年もその楽しみな季節がやってくる。

文学とは全く疎遠だった私だが、文学に関連した様々な楽しみ方に触れることで、その奥深さをちょっぴり認識できたように感じる一年でもあった。

（松尾晋次）

新職員の紹介

ご縁があり、6月から文学館でお仕事をさせていただくことになりました。

常設展や企画展などを通して、高知の魅力や文学の楽しさをお伝え出来るよう精一杯頑張りたいと思います。皆様のご来館を心よりお待ちしております。

学芸課　常安紀恵

高知県立文学館ニュース　第102号　令和5年8月16日発行　〒780-0850　高知市丸ノ内1丁目1番20号　電話088-822-0231　FAX 088-871-7857

高知県立文学館カレンダー

好評開催中！

アリスの世界展

―不思議な冒険の招待状―

- 会　期　令和5年7月8日(土)≫9月18日(月祝)
- 時　間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 会　場　高知県立文学館　2階　企画展示室
- 観覧料　500円（常設展含む）
  ※長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

展覧会の紹介をしています！詳しくは2ページ目をご覧ください。

アリスクイズ

正解数に応じ「アリス」の缶バッジをプレゼントします。

- 会　期　令和5年9月2日（土）、3日（日）
- 時　間　各日とも10：00～16：00　※申込不要
- 参加費　要当日観覧券

ファイナルイベント

「アリス」を愛する皆さんに感謝を込めて。抽選でステキなプレゼント！

- 会　期　令和5年9月18日（月・祝）
- 時　間　9：00～16：00　※申込不要
- 参加費　要当日観覧券

©KAIYODO

次回開催

めざめる探偵たち

～文豪ストレイドッグス×高知県立文学館～

- 会　期　令和5年10月7日(土)≫令和6年1月8日(月祝)
- 会　場　企画展示室
- 観覧料　500円（常設展含む）※長寿手帳等お持ちの方・高校生以下は無料

※12月27日～1月1日は年末年始のため休館。

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・3ページ目をご覧ください。

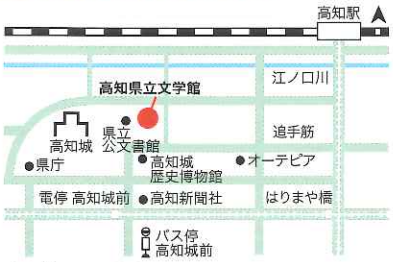
ⓒ2018 朝霧カフカ・春河35/KADOKAWA/文豪ストレイドッグスDA製作委員会

高知県立文学館で開催する企画展・その他事業は職員全員で消毒・清掃を行い、安心・安全に利用いただけるよう感染予防・拡大防止対策を行っております。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日	年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休 ※その他、メンテナンス等で臨時休館することがあります。
観覧料	常設展一般370円　企画展はそれぞれ異なります。 20名以上の団体は2割引。高校生以下無料。 身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料です。 （窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります）
駐車場	なし。ただし近隣に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室
運営	公益財団法人　高知県文化財団

交通のご案内



- ●JR高知駅から徒歩20分（またはバス・路面電車を利用）
- ●バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
- ●高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」下車、徒歩20分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
高知県立文学館 検索